

⑨ 球磨農業研究所（59年間の主な業績）

1 作物部門

昭和 52～56 年 球磨地域向けに水稲「コガネマサリ」「ミナミニシキ」及び「シンレイ」を奨励品種に採用した。

昭和 56 年 転換畑大豆の安定生産技術を開発した。

昭和 58～62 年 球磨地域の銘柄米確立のため、水稲「コシヒカリ」の中山間地における早植栽培による安定生産技術を開発した。

平成 2～4 年 水稲「ヒノヒカリ」の球磨地域における栽培特性を明らかにし、作期幅の拡大による品質安定と低コスト生産技術を開発した。これによって、乾燥施設の利用拡大や労働ピークの解消に役立つことになった。



各移植時期における「ヒノヒカリ」の生育中期の草姿

平成 10 年 山麓準平坦・球磨地域向けの水稲県育成品種「夢いずみ」の安定栽培法を開発した。

平成 12 年 球磨地域における裸麦の生産安定と品質向上及び作業の省力化を図るため、被覆尿素肥料による裸麦「イチバンボシ」の安定栽培法を確立した。

平成 18 年 水稲乾田不耕起直播栽培における前作緑肥作物としてレンゲ及びヘアリーベッチの利用技術を開発した。

平成 21 年 昭和 42 年から実施してきた水稲の肥料三要素に関する試験について、適正施肥基準策定のための基礎資料として成果を取りまとめた。

2 野菜部門

昭和 49～50 年 球磨地域の火山灰土壌台地でのスプリンクラーによる畑地かんがい栽培におけるショウガのかん水開始の目安となる土壌水分含量を明らかにした。

昭和 52 年 球磨地域の火山灰土壌における夏スイカ並びに秋ダイコン栽培に対して、十分発酵し腐熟化したオガクズ牛ふん尿の適正施用量を明らかにした。

昭和 53 年 球磨地域における秋播きレタスの有望品種と播種適期を明らかにした。

昭和 54 年 球磨地域におけるプリンスメロンの単棟ハウス栽培では、播種適期が1月5日以降であることを明らかにし、台木に適するカボチャの2品種を選定した。



収穫直前のプリンスメロン

昭和 63 年 秋どりブロッコリーの側花まで収穫する長期どり栽培法を確立した。

平成 3 年 球磨地域における初秋どりアールスメロンの有望品種を選定した。

平成 10 年 球磨地域におけるナスの早熟栽培に適する、樹勢コントロールが容易で、収穫初期から収量が高く青枯病抵抗性を持ち合わせている有望台木を選定した。

平成 14 年 球磨地域における雨よけキュウリの作型を明らかにし、有望品種を選定した。

平成 16 年 球磨地域におけるトマトの加温抑制栽培と半促成栽培の作型を組み合わせることで、促成栽培より商品化収量や粗収益が増加することを明らかにした。また、それぞれの作型での有望品種を選定した。

平成 19 年 球磨地域におけるイチゴ「ひのしずく」の適正な鉢受け時期は6月10日ころまでであることを明らかにした。

平成 22 年 冷凍加工用春播きハウレンソウにおいて、従来より収量性に優れ、雑草の混入を減らす栽植様式を明らかにした。

3 茶業部門

昭和 51 年 機械摘み茶園における整枝時期の早晩が一番茶収量に及ぼす影響を明らかにした。

昭和 53 年 トンネル被覆による防霜効果を実証するとともに、防霜被覆資材の色を変えることによる品質向上効果を明らかにした。

昭和 60 年 スプリンクラーの多目的利用による気象災害防止対策について、散水氷結法が防霜効果が高いことを明らかにした。

平成 7 年 簡易被覆法による一番茶の生育促進効果を明らかにし、通常より早く一番茶を収穫することが可能となった。

平成 12 年 茶葉の原葉形質に適応した煎茶の揉捻時間、揉捻機の回転数を明らかにした。

平成 13 年 製茶機械の稼働率向上と収益の増大を図るため、翌年一番茶への収量・品質に影響を及ぼさない良質な秋摘み茶を生産する茶園管理及び製茶法を開発した。

平成 21 年 省力的かつ早期に樹勢を回復させ、改植期を一定期間延長する方法として、大型ハンマーナイフモアによる茶園台切り更新法を開発し、更新作業の機械化及び茶樹の早期樹勢回復技術を確立した



大型ハンマーナイフモアによる茶園の台切り

平成 22 年 21 年間の発生予察データと気温との関係を解析し、球磨地域におけるチャノコカクモンハマキの発蛾最盛日の簡易予測法を確立した。

4 果樹部門

昭和 53～58 年 球磨地域におけるクリの施肥法や整枝・せん定法を開発した。

昭和 63 年 樹高が高くなり過ぎたクリ樹の樹勢回復と若返りを図るため、パラソルカットによる樹形改造法を開発した。

平成 2 年 傾斜地クリ園での低樹高化を図るため、オールバックによる樹形改造法を開発した。

平成 9 年 ナシにおいてトンネルハウス栽培が露地栽培より台風時の落果被害が少ないことを明らかにした。

平成 13 年 他の主要品種と比べて収量が上がりにくいナシ「幸水」における連年安定多収のため予備枝利用法を開発した。

平成 14 年 クリの副梢利用大苗密植栽培による早期成園化技術を開発した。

平成 15 年 モモ栽培の経営安定と労力分散を図るため、「日川白鳳」以前に収穫可能な早生モモの有望品種「はなよめ」を選定した。

平成 22 年 低コストで導入可能なトンネルハウスでのモモの高品質・安定生産のための栽培技術を確立した。



モモのトンネルハウス栽培



「はなよめ」

平成 22 年 成木における結果習性について明らかにされていなかった、クリ「ぼろたん」の高品質安定生産を図るため、優良結果母枝の資質と適正な設置本数を明らかにした。